

# 芝浦工業大学 2015年度大学外部評価委員会の総括

2016年5月25日

芝浦工業大学外部評価委員会

## I. 経緯と総評

### 1. 経緯

2015年度大学外部評価にあたっては、大学が作成した自己点検・評価書に基づき、5名の外部評価委員が事前に書面評価を行った後、2016年2月18日に、外部評価委員と村上学長をはじめ副学長、各学部長、研究科長、学事部長等学内の主な教学関係者が出席する委員会を開催し、学長による総括的な説明や質疑応答を踏まえて最終的な評価を行った。本総括は、同委員会の議事録及び5名の外部評価委員が事前に提出した所見に基づき、評価の結果をとりまとめたものである。

### 2. 総評

建学の理念を現状に即して読み替えた「世界に学び世界に貢献するグローバル理工学人材の育成」を基本に据え、2015年度からは創立100周年に向けた大学戦略 Centennial SIT Actionに取り組むなど、明確な目標を掲げた挑戦的な活動を、学長のリーダーシップの下、進めている。大学にとっては厳しい時代であるが、やりがいのある時代でもある。引き続き大きな原動力をもって発展していただきたい。

今年度の自己点検評価においては、教職協働の重要性を掲げながら、種々の取組に職員または職員組織がどのように関わっているか十分に把握することはできなかった。ダイバーシティは教員組織だけでなく、職員組織においても重要な課題であり、経営・教学のいずれにおいても、職員が如何に能動的に関わるかによって、大学の競争力に大きな差が生じる可能性が高い。そのことを踏まえて自己点検・評価を行っていただきたい。

以下、項目別の評価については、5人の委員の見解を可能な限りそのまま記載している。

## 教育・学生・研究及び質保証への取組

### 1. 理念・目的

- (1) 建学の理念を下に、2008年から創立90周年に向けた全学活動として「チャレンジSIT-90作戦」を展開するとともに、2015年度からは「100周年に向けた大学戦略(Centennial SIT Action)」に取り組むなど、明確な目標を掲げた挑戦的な活動を全学的に展開している。
- 一方で、Centennial SIT Actionに掲げた5つの取り組みの柱である、教育の質保証、大学の国際化、ダイバーシティ、イノベーション創出への参画、学生満足度の向上について、現状がどうなっているのか、点検・評価報告書からは具体的な状況が十分には読み取れない。今後、定期的に検証を行うためには、定量情報を含む事実の客観的な把握が不可欠であり、IRの充実が急務と考える。
- (2) 大学創立90周年に向けた全学活動をさらに発展させて、「100周年に向けた大学戦略」のもとで、5つの具体的な取組みを設定している。この中で、「学生満足度の向上」は、国際的な大学ランキングにおいても重要視されている観点であり、私立大学として最も重視すべき点の一つである。
- (3) 建学の理念を現状に即して読み替えた「世界に学び世界に貢献する実践型技術者の育成」という考えは明確で、これに基づいて国の関連事業プログラムに申請、採択され、着実に実施していることで内外に大学の理念・目的を知らしめていると考える。

## 2. 文部科学省、経済産業省等補助事業への取組

2014年度に採択されたSGU、AP、COC、女性研究者研究活動支援事業等は、世界に学び、世界の貢献する理工系人材の育成のプログラム推進の原動力となる事業でもあり、その相乗相補効果によって国際化、教育の質保証、SITブランド、あるいはイノベーション創出への参画といった取り組みが加速・充実されつつあると考える。

### (1) スーパーグローバル大学創成支援

- ①海外派遣者数が前年比35%増(見込み)ということで成果は着実に出ていていると考える。  
私立理工系大学として唯一本事業に採択されたという点で、本事業を成功させる責務もあり、今後とも成果を出し続けて欲しい。
- ②TOEICのスコアに象徴される学生の英語力は全般に厳しい状況にあることが報告書から窺われる。挑戦的な目標と現実の差をどうやって縮めていくか、より具体的な検討を期待したい。
- ③学生に対する教育体制は整えつつあるが、今後、教職員(特に、職員)のグローバル化への対応にも力を注ぐと、更なる質の向上が図れると考える。
- ④海外派遣学生数を年々大きく伸ばしている。課題としては、この事業の趣旨をより多くの学生に浸透させることと、数値目標の達成であろう。特に数値目標の達成は容易でな

いと思うが、期待したい。

(2) 大学教育再生加速プログラム

①何をアクティブ・ラーニングとするかは学部の解釈に依存している点も見受けられるなど、学部レベルにおいて、具体的にいかなる成果が得られているのか、報告書からだけでは判然としない面もある。

②SCOT(Students Consulting on Teaching)は、学生の意見を取り入れる制度として新規性があり、本事業の中でも高く評価したい。

(3) 女性研究者研究活動支援事業

①学内の意識の変化や女性教員比率の向上など、目に見える形で成果が現れており、高く評価したい。

②女性研究者研究活動支援事業（一般型）は今年度で事業が終了するが、大学として、現状以上の支援の継続を期待したい。

(4) 経済産業省産学連携サービス経営人材育成事業

①経産等補助事業では、成長戦略としての産業分野活性化や生産性向上を掲げてサービス経営人材育成事業に採択され、関連研究科を中心に積極的に取り組んでいる。

### 3. 教育活動と教育体制の整備

(1) 「大学が何を教えたか」ではなく、「学生が大学で何を学んだか」という学修成果（アウトカムズ）重視の取り組みを全学的に展開していることを高く評価したい。一方で、これまでの外部評価でも指摘してきたことだが、教育の実施責任が、全学、学部、学科でどのように分担されているのか、報告書からだけでは依然として不明確であり、全学的な方針が、学部を通じて学科に至るまで、どのように貫かれ、それが担保されているのかもわかりにくい。

(2) 全学、学部、学科のそれぞれのレベルで、特筆すべき取り組みを行っていることは理解できるが、全体の構造を可視化することと、大学として掲げた教育方針と現実の学生の意識・学力の関係をどう認識し、如何なる手順で全学方針を実効ある形に結びつけるかについて、さらなる検討を期待したい

(3) 全学的な教育目標を掲げるとともに、各学部・学科において専門分野に応じた具体的な教育目標を設定している。現状の把握と教育成果の検証、改善すべき事項と改善方策を立てている。

(4) アクティブ・ラーニングについて、「数値的に目標を達成しているが、学生の参画が不十分である」あるいは「アクティブ・ラーニングへの理解や認識のずれがある」とされているのは、「アクティブ・ラーニング」自体のわかりにくさのためでは無いか。「能動的

に学習する」という目標はわかるが、具体的にどうするのか、手法と具体例を挙げて粘り強く説明していく必要があると考える。

- (5) SGU（スーパーグローバル大学創成支援事業）に採択されたことで、学生と教職員が世界に目を向け、海外との積極的な交流等を通じ「世界に学び、世界に貢献する理工学人材の育成」（建学の精神の発展的援用）を強く意識し、その実践に取り組んでいることは評価に値する。

#### 4. 研究活動と研究体制の整備

- (1) 専任教員数約 300 人という限られた人的資源のため、個々の教員の教育負担も大きく、かつ国の様々な補助事業の推進に伴う負担もある中、大学として研究支援体制を強化し、個人研究と組織的な研究の後押しを行っている。その結果、科学研究費補助金については、申請件数・採択件数とも着実に増加している。
- (2) 産学官連携コーディネーターが配置されて一定の成果をあげているとともに URA の配置が検討されている。研究の実際面でも共通機器センターの整備が進んでいる。
- (3) 個人における研究活動は、科研費や共同研究・受託研究数からみると、件数・金額ともに、微増もしくは昨年同等である。それに対して、コンソーシアムを形成する研究が活発になっており、複雑・多様化する研究を、多くの研究者で遂行することは好ましいと考える。社会科学系、芸術系の研究者とも連携することにより、イノベーション創出を期待したい。

#### 5. 入学者選抜・学生情報

- (1) 学部については、一般入試の志願者数がこの 3 年で過去最高を更新し続けていること、入学者の 7 割近くがセンター利用方式を含む一般入試での入学者で占められていることは学生の多様性を確保する上でも良いことであり、高く評価したい。入試広報のみならず、教育活動の高度化に向けたこれまでの取り組みが、受験生・保護者や高校等から評価されている結果と考えられる。
- (2) 学生の受け入れ方針をアドミッションポリシーとして明示し、留学生、社会人にわたる多様な選抜を行うとともに、「国境なき科学」における留学生の受け入れ、SGUプログラムの採択、あるいはハイブリッド講義など多様な人材の受入に応じた積極的な取り組みを行なっている。
- (3) 一時的にせよ留学生の受け入れが目標数を充足したことも評価できる。今回のような政府派遣の留学生プロジェクトを他国からも誘致することで、継続的な受入増に続くので

はないか。

- (4) 女子学生の受け入れは、目標としている受け入れ人数と現状人数とが大きく乖離していることから、更なる工夫が必要といえる。
- (5) いわゆる LGBT への対応は大学における新たな課題であり、先進的な取り組みを行っている大学もある。位置付けも含めて、慎重な検討をお願いしたい。
- (6) 障害を持つ学生の受入とサポートは、どこの大学でもスタートしたばかりで、試行錯誤の時期が続くことであろう。他大学とも情報共有を密にして、迅速なサポート体制の整備を進めることを期待したい。

## 6. 学生支援

- (1) 学生支援についても、実施責任が、全学、学部、学科でどのように分担されているのかが、より明確に示されることが、評価にとって不可欠である。
- (2) 授業評価や学生満足度調査などが実施されているようだが、その結果の概要だけでも表形式で掲載し、大学としてそれをどう評価し、如何なる対策を講じようとしているのかを明確にしないと、外部評価も難しいし、PDCA が回っているとは言えない。
- (3) 学生の学修支援の具体はセグメントによらず学部および研究科を横通すことによって全学横断的に行われるべき側面もあるのではないか。
- (4) 手厚い保険制度と奨学金制度がある。貸与型奨学金制度の貸与金残高縮減の努力を続ける必要がある。
- (5) 学生からの多様なニーズに応えるキャリア支援は、容易ではない。その中で、満足度を数%上げている点は、大学の努力の成果であろう。学生の気質のみならず、就職活動時期や企業の採用方法などの変化もあり、社会の動きを把握した上でのキャリア支援に努めて行く必要がある。
- (6) 工学部の「学習サポート室」のような制度は非常に素晴らしいと考える。このような制度は他学部にも類似の取り組みをしている記載が見られるが、取り組みが若干異なるようにも見受けられる。ノウハウ、リソース（人材）の共有化をすればより良い制度となると考える。
- (7) 教員の授業負担が総じて高く、教員間の負担にもバラツキがあるように見受けられる。バラツキを少しでも是正すると同時に、管理運営的業務の効率化などを進め、研究できる環境を整えることも今後の課題と思われる。

## 7. 内部質保証

- (1) 内部質保証の基本は、組織単位ごとに、当該組織が負うべき責任を明確にした上で、自律的かつ持続的に質を向上させる仕組みをビルトインすること、その仕組みが機能しているかどうかを当該組織の外から検証する仕組みがあることである。また、定量情報と具体的な定性情報が効率的かつ継続的に把握できる仕組みがあって、はじめて質保証が機能すると考えられる。これまでの取り組みにより、すでに一定程度できあがっていると思われるが、そのことがわかる報告書となるよう、改善を図っていただきたい。
- (2) 規程を整備し評価委員会の構成およびその運営内容を明文化しており、大学、3 学部、大学院 2 研究科は、それぞれ自己点検・評価システムを持ち、質保証システムを機能させているといえる。
- (3) 適切な評価体制を整備して、教育の質保証のための点検・評価を行なっていると判断する。父母懇談会で保護者からの信頼を得ていることは、私立大学として重要な点である。

以 上（文責：吉武博通）